

メキシコのチアパス併合に関する一考察（一八二一—一八四二年）

小澤 卓也

はじめに

拙著『先住民と国民国家—中央アメリカのグローバルヒストリー』（有志舎、二〇〇七年）において筆者は、サパティスタ民族解放軍の活動によって一躍世界の注目を集めたメキシコのチアパス州が「ラテンアメリカを代表する大国メキシコの辺境にありながら、中米地峡の小国（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ）とも深い歴史的関係にあった」とし、チアパスの問題を従来のようなメキシコ史の文脈ではなく、よりグローバルな「中米史」の視点で考察すべきだと指摘した^①。【地図①参照】。チアパス問題を一国史の枠組ではなく、相互に影響を与え合っている中米地域史の一部として捉えることによって、国境を越えて展開される先住民と国民国家の間の壮大な歴史的関係を描こうというのがその狙いであり、それは一定程度達成されたと考える。

しかしながら本書の中では、一九世紀後半から現代に至る中米諸国・地域間の歴史的連関や連続性について指摘されているものの、ページ数の制限などもあって、それ以前のチアパスと中米地峡諸国の関係については詳細に記述されていない。一八二一年に中米諸国が宗主国スペインから独立してから、現在のメキシコからパナマまでの国家の基盤が形成される一八四〇年代までの歴史は、その後の中米における国家のありよ

うや国民概念の変遷を見る上で重要であるにもかかわらずである。本稿はこの欠落部分を補完すると同時に、これまで日本ではまったくと言って良いほど詳述されてこなかったチアパスとメキシコ、あるいは中米との間の複雑な歴史的関係を通じて画定された国境や、それに伴う国家帰属意識の変遷について論じようとするものである。

とは言え、この作業は容易ではない。実のところ現地ラテンアメリカにおいても、史料不足の問題などもあり、一九世紀前半における中米諸国の歴史的動向はスペイン植民地時代のように詳細に研究されてこなかった。むしろ、近年のサパティスタ民族解放軍の運動が国際的に注目を集めるようになってようやく、チアパスを固定的な「メキシコの一州」と見なすのではなく、その歴史的独自性や周辺地域との流動的な関係性の中に位置づける歴史研究が発展し始めたばかりである。こうした状況を踏まえ、筆者の本稿における目的は、まずもって最新のチアパス史研究を整理・分析してそのエッセンスを大きな中米史の文脈で捉え直し、今後現地の史料に基づいた本格的なチアパス研究が日本で行われる際の最初の叩き台を提示することとしたい。

一 スペインからの独立

一六世紀初頭から一九世紀初頭に至るスペイン植民地時代のラテンア

メリカ全域において、スペイン系を中心とする白人系住民が、人種・民族差別に立脚して非白人系住民（先住民や黒人などの有色人や混血民）を支配し続けてきたことはすでによく知られている。さらに白人支配層の中でも、様々な最高位職を独占したスペイン生まれのペニンスラールと、その下位に置かれたラテンアメリカ植民地生まれのクリオーリオの間には厳然とした政治的地位の差異が存在していた。この時のクリオーリオ（独立後、今度は彼らが新たなエリートを形成し、大衆を政治から排除することになる）のペニンスラールに対する蓄積された不満が、一九世紀初頭におけるラテンアメリカ独立運動の一要因となる。

メキシコ市を中心とするヌエバ・エスパニーヤ（メキシコ）は、シモン・ボリーバルやホセ・サンマルティンに率いられてスペインに反旗を翻した南米大陸諸国と同様、クリオーリオを中心に激しい独立戦争を開始した。これに対して、当時のチャパスはグアテマラ軍務総督領（グアテマラ市を首府とする現在のメキシコ・チャパス州、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマ東端部を含む行政区）に帰属しており、メキシコで勃発した独立戦争には関与しなかった。グアテマラ支配下の中米地峡には、その国力の脆弱さからスペインの保護下にあり続けることを望む支配層が少なからず存在していた。彼らは、この時期のラテンアメリカ（ブラジルとカリブ海諸国は除く）の中で対スペイン戦争を起こさなかった希有な存在であった。チャパスはこの中米地峡というラテンアメリカにおける辺境地域のさらに辺境に位置していた。結局、戦争を経て一八二一年に独立したメキシコと、ボリーバルを大統領に一八一九年に独立した大コロンビア共和国（現在のベネズエラ、コロンビア、エクアドル、パナマを含む）に挟まれる形となった中米地峡諸国は、この両大国を敵に回したくないという政治上の判断によりスペインからの独立を宣言することになる。

興味深いことに、秘密裏であるにせよ中米で最初の独立宣言（一八二一年八月二八日。メキシコと中米の独立日である同年九月一日より早い）を採択し、同時にアグスティン・デ・イトゥルビデ帝政下で提示された「イグアラ憲章」（独立、人種差別の撤廃、教会の財産や特権の保護などを謳う）を受け入れ、メキシコへの併合を望んだのは、独立戦争を経なかった「辺境の辺境」のコミタン（チャパスの有力都市の一つ）であった。その後、チャパスの首府であったシウダレアル（現在のサンクリストバル・デ・ラスカサス）やトゥストラ（現在のチャパスの首府トゥストラ・ゲティエレス）らがこれに追随することになり、ほぼ高位聖職者によって占められたチャパス最高議会を通じて、一八二二年一月一六日、チャパスのメキシコ帝国への「永遠の併合」が公式に宣言された。この迅速な決定の背後には、チャパスが置かれてきた特殊な歴史地理的環境があつた【地図②参照】。

一八一四年に実施された人口調査によると、チャパスの人口は約一三万人であり、そのうちマヤ系を中心とする先住民が一〇万五〇〇〇人（八〇・八％）、メスティソ（白人と先住民の混血）が二万一五〇〇人（一六・五％）、スペイン系白人が三五〇〇人（二・七％）となっている。しかも、チャパスの政治エリート層が集中するシウダレアルにおいてさえも、人口六一九八人中、白人住民は七〇〇人（一一・三％）に過ぎない。このようにチャパスは、ラテンアメリカの中で最も先住民人口の多かつたボリビアやグアテマラに匹敵する「インディオの国」であったにもかかわらず、僅か一握りのスペイン系白人がその政治・経済を独占し、圧倒的多数の先住民を支配下に置くという、人種・民族差別による社会的歪みの顕著な地域であったことをまず確認しておく必要がある。

しかもチャパスは、グアテマラ市の政治エリート層から放置され、彼らから現実的な利益がほとんどもたらされないまま支配され続けていた

地図①：現在の中米諸国



地図②：チアパスとその周辺

メキシコのチアパス併合に関する一考察（二八二二—一八四二年）

地図③：現在のグアテマラ（ロスアルトスを中心に）



グアテマラ軍務総督領の辺境地だった。このためチアパスのエリート層は、独立戦争の混乱を機にグアテマラ当局からの自立を試み、グアテマラよりも強大なメキシコへ接近したのである。旧グアテマラ軍務総督領において特権的な地位を確立していたグアテマラ・エリート層のくびきから脱したいとする願望は、他の中米地峡諸国においても同様に見られた。テグシガルパの銀採掘業に依存していたホンジュラス、牧畜業に利のあつたニカラグア、タバコやサトウキビ産業を基盤としたコスタリカ、そして織物業の発達していたケツアルテナンゴを中核とするロスアルトス（現在のチアパス南端部とグアテマラ西部を併せた高地地帯）などの保守派エリート層たちが、「カリフォルニアからコスタリカまで」広がるメキシコ帝国の建設を議論むイトゥルビデの傘下に入ろうとしたのもこのためである（ただし、グアテマラ・エリートの最大のライバルであり、インディオ生産で利益を上げていたエルサルバドルの首都サンサルバドルの支配層や市民の蜂起に代表されるように、絶対的な自立を望んでメキシコ併合に反対する自由主義者たちも各地に存在していた）【地図③参照】^⑥。

イトゥルビデにとつても、チアパスがメキシコへの併合を望んでいることは好都合であつた。帝国主義的拡大を目指すイトゥルビデにとつて、タバスコとユカタン半島の背後に位置し、テウアンテペク地峡に隣接する戦略的拠点としてチアパスを確保しておくことは重要だったからである。イトゥルビデはチアパスの再領有を狙うグアテマラを牽制するため、ピセンテ・フイリソラ將軍率いるメキシコ軍をチアパスに送ったが、チアパス側からも少なからずこの軍隊に従軍する者がいた。その背景には、イトゥルビデが併合後の中米を三地域に再区画化し、その拠点の一つをシウダレアルに置くという計画に対する期待があつた。この計画によってシウダレアルは、チアパスのみならず周辺のタバスコ・トトニカパン・ケツアルテナンゴも統括する行政の拠点となるよう約束されてお

り、このことが一部のチアパス人を熱狂させた。さらにイトゥルビデは、独立宣言以降凍結されていたチアパスのグアテマラに対する負債の不払いを承認し、メキシコ人官僚による統治を行わず、伝統的エリート層であるチアパス人の政治家・官僚・軍人の地位を尊重したのである。^⑦

反対にグアテマラ・エリートは、かつて支配下に置いていたチアパスを始めとする中米地峡諸国が次々とメキシコのイグアラ綱領を受容し、メキシコへの併合の動きを加速化していく中で、自らの態度を決めかねていた。やがてメキシコからの軍事的圧力が強まると、グアテマラもイグアラ綱領を批准せざるを得なくなり、自国のメキシコへの併合を決意した。こうして一八二二年、チアパスからコスタリカに至る中米諸国（中米の統一に反対し、この地域への支配力強化を狙うイギリスが押さえていた、後のベリーズを含む中米地峡カリブ海岸地域は除く）がすべてメキシコの領土となつた。しかし、すぐにイトゥルビデの元同僚として独立戦争で活躍したアントニオ・ロベス・デ・サンタアナがベラクルスで反乱を起こして共和国の樹立を宣言し、一八二三年三月、イトゥルビデは国外に亡命してメキシコ帝政は崩壊した。^⑧ イトゥルビデの失脚後、この皇帝に自らの運命を託していた中米の保守派エリートは、早急に新たな国家の枠組みを模索しなくてはならなかつた。

このように、かつてグアテマラ領内にあつたチアパスは、他の中米地峡諸国と同様に戦争を経ず、明確な国家・国民意識も確立されないうまに独立した。そして、チアパスのメキシコへの併合も、チアパスの多数派住民による選択ではなく、エリート支配層の政治的判断によるものであつた。

二 メキシコとグアテマラの狭間で

イトウルビデ帝政の崩壊直後、中米地峡諸国はメキシコからの分離独立を決定し、旧グアテマラ軍務総督領諸国によるアメリカ合衆国の連邦制をモデルとした中央アメリカ連邦共和国（以後、「中米連邦」と表記する）の結成を急いだ。チアパス内でもトゥストラとコミタンがメキシコへの併合の無効を宣言したのに対し、シウダレアルだけは一八二三年になってもメキシコへの忠誠を維持し続けた。このためチアパス議会は紛糾し、その後のチアパスが中央集権的国家となるか、あるいは各地域がより広範な自治を享受する連邦国家となるかについても合意がなされず、一八二四年九月までこれらの問題はこじれ続けた。

この対立はチアパスにおける都市エリート間の権力争いを反映している。この時期、植民地時代からチアパスの政治を独占してきたシウダレアルの政治家・カトリック高位聖職者・官僚などの保守主義的な政治エリートと、生産力や商業的手腕でシウダレアルを凌駕するトゥストラ、コミタン、イスタコミタン、タパチュラにおける商人・アシエンダ所有者・牧場主などの自由主義的な経済エリートが対立していたのである。

このような植民地時代以来の特権を維持しようとする保守主義者と自由主義者との権力争いも、この時期の中米全体で見られた特色である。この時期の中米における保守主義勢力の基盤は概してクリオーリョ地主階層にあり、旧来の植民地体制の維持・教会権威の存続・急激な体制変化への拒絶を特徴とした。対する自由主義勢力は、植民地体制からの脱却（奴隷制の廃止や重税の軽減など）・教会権力の制限・急速な経済開発の推進を主張する白人・混血の専門職業人層や地方の地主たちによって支えられており、中米の統一を重視する傾向にあった。もともと、植民地時代から継続して中米社会の最下層に押し込まれてきた先住民たちにとってみれば、自分たちを抑圧するという意味で保守主義者と自由主義者との間に差違はなかった。保守主義者は先住民労働力を植民地時代

さながらの制度で土地に縛り付けようとし、反対に自由主義者は先住民を自由な労働力として解放したいと考える傾向にあったが、どちらも先住民の土地と生活を犠牲にすることで利益を上げようとしていた点で同じだった。

加えて、この政治闘争に有力都市間の抗争が絡んだ。エルサルバドルでは伝統的なサンサルバドルの権力者に対して新興のサンミゲルやサンタアナの支配層が反発していた。まったく同じ構図でホンジュラスではコマヤグアに対してテグシガルパ（後に首都となる）が、ニカラグアではレオンに対してグラナダやマサヤが、ロスアルトス地区ではケツアルテナンゴに対してトトニカパンが、コスタリカではカルタゴに対してサンホセ（後に首都となる）が権力闘争を挑んでいた。各国における首都の伝統的エリート層はこうした新興都市との闘争を繰り広げながら、同時に中米地峡全域を統括し続けようとするグアテマラ市の動向にも警戒していた。これに対して新興都市側は、自国内での権力を掌握するために「敵の敵」であるグアテマラと手を結ぼうとした。こうした各都市間の対立や抗争を包含したまま、中米連邦が成立することになるのである。

ただしチアパスの場合、トゥストラやコミタンなどの新興都市が他国ほど激しく首都のシウダレアルと衝突することはなく、自らの立場を有利にするためにグアテマラと公に同盟することもなかった。この時期のトゥストラ・チアパ・コミタン・タパチュラなどには、チアパスも中米連邦に参加すべきだと明言していた有力者がいたにもかかわらず、どういふ訳か彼らのグアテマラに対するあからさまな接近は見られなかった。その理由は、なぜ軍事力でシウダレアルに勝るトゥストラが力によって政権を奪取しなかったのかという謎と共に、いまだ学術的に明らかにはされていない。他方、一八二三年六月にグアテマラは、メキシコ領

内のチアパス、オアハカ、ユカタン半島なども「中米」であるとし、自らの自由意志で中米連邦構想に参加するよう呼びかけた。これに対して共和政へ移行したメキシコは、イトゥルビデ失脚後グアテマラに身を寄せていたフリーソラ將軍に命じてチアパスをメキシコに再併合するために様々な策略を行った。

一八二三年一〇月、コミタンは機先を制するように「自由チアパス計画」を掲げ、チアパスの一二のパーティド（主要都市を中核とした行政区。この下に一〇四の市町村が属する）によって構成される最高議会の再設置を求めつつ、自らの自由意志でメキシコとグアテマラのどちらに併合されるかを決定することができると主張し、しかも各地域の自治が大幅に認められるような新しいチアパスの建設を要求した。これに対して、保守派の軍人ホアキン・ベラスコは、「メキシコに統合された自由なシウダレアルか死か」とのスローガンを掲げてシウダレアルの丘陵地帯へと軍を進めると、コミタンの自由主義者もトゥストラやイスタコミタンの同胞と共に「村落連合」を結成し、「自由なチアパスか死か」を旗印にシウダレアルに軍を進め一歩も引かなかった。¹³⁾

ところが一八二四年一月、次第に強まるメキシコからの圧力によって、膠着したチアパスの政治状況に大きな変化が見られた。まずシウダレアル市議会の主張を汲み取った最高議会が「村落連合」軍をシウダレアルから移動するよう命じ、その直後に実施されたコミタンの市議会選挙においては「自由チアパス計画」を推進していたマティアス・ルイスが敗北したのである。そして再びコミタンは、シウダレアルの伝統的支配層に忠誠を尽くすと共に、メキシコへの併合を承認する方針へと転換した。なぜこのような状況になったかについての詳細はまだ説明されてはいないが、これによって「村落連合」が瓦解し、シウダレアルを中心にチアパスがメキシコに再併合される道筋がつけられたことは疑いない。同

年三月、シウダレアルとコミタン連合は、ライバルであるトゥストラとイスタコミタンの代表が議会を欠席した機を利用し、各市町村の代表者が投じる票の単純な合計によって議決する方法から、各市町村の代表者が投じる一票をその管轄地に居住する住民の総数に換算して計算する議決法に変更した。これによって、抱えている住民数の多いシウダレアルやコミタンの政治的発言権はさらに強まった。¹⁴⁾

同年五月、この「政変」に反発するソコヌスコ地区の有権者がタバチユラに集い、その翌月にソコヌスコのチアパスからの離脱を宣言し、さらに同年八月にはソコヌスコのグアテマラへの編入を決定した。このときソコヌスコの有権者たちは、間違いなくメキシコよりも中米連邦に併合されることを望んでいたのである。すぐにグアテマラはこの申し出を受諾し、ソコヌスコへと自軍を進めたが、メキシコ側もこの行動を黙認するはずはなく、ソコヌスコを「奪還」するためのグアテマラ軍との決戦を匂わせてトナラへと軍隊を移動させた（実際にはメキシコ、グアテマラ双方ともに深刻な内政問題を抱えていたため、できれば戦闘を回避したいと考えていたようである）。この緊迫した状況下において、自分たちの領土が戦禍によって荒廃することを恐れたソコヌスコの代表者たちは中立を宣言し、以後一七年間に渡ってメキシコ、グアテマラ、そしてチアパス最高議会からも一定の自治を享受することになった。¹⁵⁾

そして、一八二四年九月、チアパスにおいてメキシコとグアテマラのどちらに併合されるかを決する、各地域を代表する有権者による投票が行われた。その結果、シウダレアルやコミタンを中心にメキシコへの併合に賛成する票が九万六八二九（約五六パーセント）、トゥストラやソコヌスコを中心にメキシコへの併合に反対する票が六万四〇〇（約三五パーセント）、「どちらでも良い、あるいは中立」を表明する票が一万五七二四（約九パーセント）であると公表された。この結果を受けて、チア

パス最高議会はチアパス全土が「自由州」としてメキシコに併合されると宣言し、この決定に強固に反発したトゥストラも最終的にはこれに従うことを余儀なくされた。^⑩

この投票結果から分かることは、チアパス有権者の三分の一以上がグアテマラを中心とする中米連邦への併合を望んでいたということである。しかも既述のように、投票前に採用された反メキシコ派にとって不利な議決法に加え、都市部にとって圧倒的に有利な区画割り、その多くが政治エリート層によって占められる代表者を通じた間接選挙制、乳児を含めた子供による投票の存在、投票数の不正操作などを考慮するならば、公表された得票が果たしてチアパス住人の多数派の意見を反映しているかどうかについても検討の余地がある。^⑪ その後もチアパス内では、後にチアパス知事にまで登り詰めることになるホアキン・ミゲル・グティエレスに象徴されるように、トゥストラ（トゥストラ・グティエレス市は、紆余曲折を経ながらやがてチアパスの首府となる）出身者を中心とした、中米連邦に共感する自由主義者の政治的影響力は、低下するどころかむしろ強まっていく。

チアパスの権力を握った自由主義者に敵対心を募らせた中央集権主義者のサンタアナは、一八三四年にチアパスを軍事攻撃し、グティエレス知事を追放（グアテマラへ亡命）して中央集権主義的な保守政権をチアパスに復活させた。グアテマラにおけるマリアーノ・ガルベス自由主義政権の崩壊を皮切りに、中米連邦が自由主義者と保守主義者の激しい対立や主要都市間の権力争いなどによって崩壊の道を突き進んでいった一八三八年、グティエレスら自由主義者は再度チアパスに戻ってトゥストラを奪還したが、すぐにメキシコ軍に包囲され敗北することになった。この混乱する中米において、身を寄せるべき中米連邦の崩壊と、中央集権化を目指すサンタアナ率いるメキシコ軍の強大さを目の当たりにしたソ

コヌスコの政治家や大土地所有者たちは、一八三九年、タパチュラ市長に懇願して自領のメキシコへの再併合を宣言させた。この頃、再びメキシコの権力者に返り咲いたサンタアナは、ユカタン半島で勃発したカスタ戦争（一八三九—一九〇一年、断続的に繰り返された白人・混血層を敵視する先住民の反乱）に対処しながら、一八四二年に約四〇〇名の兵士をソコヌスコに送り、グアテマラ側の反対を押し切ってソコヌスコのメキシコへの併合を宣言した。^⑫

以上のように、メキシコ帝政が崩れ、中米連邦が結成された時、ソコヌスコに典型的に見られたようにチアパス内の多くの地域は確かにこれに参加することを真剣に検討した。それにもかかわらず、最終的にチアパスがメキシコに併合されることになったのは、領土争いを展開するメキシコとグアテマラに挟まれた国際的環境に加え、チアパス内における旧エリートと新エリートとの間の権力闘争が影響したからに他ならなかった。

三 ロスアルトスの動向

カスタ戦争に象徴されるように、先住民たちの中米諸国政府に対する怒りは、独立した中米諸政府がかつての植民地時代より組織的・合法的・徹底的に先住民を収奪したことによって爆発した。チアパスも他の中米諸国と状況は同じであり、一八二六年と一八三二年に農業法が改定され、植民地時代に承認されていた水場や耕地を含む先住民の共同地や共有地が次々と奪われた。白人や白人系混血（ラディーノ）は先を争って先住民共同体とそれを取り巻く「未開墾地」の獲得に躍起となり、私有地を拡大していったのである。チアパスの先住民たちは、こうして拡大されたアシエンダや、あるいは政治・軍事目的の「国有地」に縛り付

けられた。一八二七年には、政治権力者の裁量で土地を自由に使用しうる法律が施行され、先住民は政府官僚や大土地所有者の抑圧に抗う法的根拠さえ喪失した。先住民は著しく立場の弱い日雇い労働者や小作人となるしかなく、かつては「彼らのもの」であった土地の借地人に甘んじることになった^⑩。先住民の怒りは当然であろう。

メキシコからニカラグアまでの中部アメリカでは人口に占める先住民の割合が多いため、彼らの動向は直接的に内政へと影響する。メキシコのユカタン半島を席卷したカスタ戦争は、先住民を主体とする人種・民族的憎悪を背景とした暴力的闘争であったが、クリオーリオやラディーノの政治家の中には先住民が有するこの莫大なエネルギーを自らの政治に利用しようとする者もいた。かつて「メキシコ独立の父」とされるミゲル・イダルゴ神父はカトリック信仰を巧妙に利用しながらメキシコ独立戦争に先住民を動員したし、中米連邦から離脱したグアテマラで二五年に渡って保守政権を維持したラファエル・カレーラは、ラディーノに対する不信感を利用して先住民勢力を自陣に引き入れた。これとは反対に、先住民人口を徹底的に力で支配し続けてきたのがロスアルトスだと言えよう。

ロスアルトスは、ケツアルテナンゴを首府とする現在のチアパス南端部からグアテマラ西部高原地帯に至る行政区であり、圧倒的多数派を占める先住民労働力によって生産される織物がその特産品であった。ケツアルテナンゴのエリート層は、一八一〇年代に自らの権力を維持するためにトトニカパン、チキムラ、ソロラに軍隊を派遣（一八二一年にはエルサルバドルにも軍を派遣している）したことからも分かる通り比較的強力な軍隊を有しており、その軍事力と体制への恭順を求める教会の宗教教育を通じて圧倒的多数派を占める先住民を従えていた^⑪。

この白人支配層（大土地所有者とそれを取り巻く知識層）は、植民地時

代を通じてメキシコ市やグアテマラ市の支配から逃れて比較的広範な自治を享受していたが、スペインからの独立の気運が中米全域を覆い尽くす状況は一変した。ケツアルテナンゴ側は一方でスペインからの独立を支持したが、同時にチアパス等と同様、中央主権主義的姿勢を強めたグアテマラ市からの独立も望んでいた。ケツアルテナンゴの有力議員であったホセ・クレト・モンティエル神父がグアテマラからの分離独立運動の中枢を担ったが、ロスアルトスの商業・交易を管理・統轄しようとするグアテマラ大商人（彼らは、ロスアルトスの商人が太平洋海岸へ直接生産品を運ぶための道路や港の建設を妨害した）に反発する白人やラディーノの商人たちもこれに加わった^⑫。こうして、グアテマラ支配に反発する他の中米諸地域と同じように、ケツアルテナンゴはメキシコへの併合を受け入れたのである。

メキシコ帝政崩壊後、中米連邦共和国にグアテマラの一部として参加したロスアルトスは、すぐにグアテマラ市から分離・独立することを目指したが、グアテマラの激しい反対によってこれは承認されなかった。その後、ケツアルテナンゴの支配層は、チアパスをめぐるメキシコとグアテマラの対立を巧妙に利用して自治を確保すると共に、ソコヌスコを含むチアパス南端部への領土拡大を見据えた。一八三五年、グアテマラ社会に蔓延したコレラの原因がグアテマラ政府の反対派や有色人に対する絶滅作戦だとする噂を利用して、ケツアルテナンゴ・エリートは再び独立のための世論作りに血道を上げた。一八三六年には、ケツアルテナンゴの有力新聞上において、ケツアルテナンゴを中心にトトニカパン、ソロラ、ステペケスの人口約二〇万人が結束し、自由主義と各地域の保全に立脚する（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカに次ぐ）中米連邦第六番目の国家を形成する必要性があると声高に唱えられた^⑬。

一八三八年、ガルベス政権の崩壊によって混乱するグアテマラを尻目に、ロスアルトスはグアテマラからの独立の準備を進め、再度中米連邦議会（このとき中米連邦大統領フランシスコ・モラサンのリーダーシップの下で自由主義者が多数派を占めていた）に自国の独立を申請し、このときはこれが受理された。モラサンの盟友でもあったマルセロ・モリーナを代表とする中米連邦六番目の国家として、ついにロスアルトスが独立したのである。モリーナは懸案であった太平洋沿岸地帯の開発を急ぎ、グアテマラの介入を恐れてエルサルバドル（一八三九～四〇年には、モラサン自身がエルサルバドルを統轄している）との外交関係を緊密化していった。

しかし一八三九年、グアテマラで保守派と結託して新政権を樹立したラファエル・カレラが中米連邦からの離脱を宣言したことにより事実上連邦が崩壊したのを受けて、ロスアルトス政府も他の中米諸国と同様に自国の「主権、自由、独立」を宣言した。このときロスアルトスは、自国の領土としてトトニカパン、ソロラ、ステテベケス、ウエウエテナンゴに加え、チアパスのソコヌスコも含むとしている（ソコヌスコ側はもともとグアテマラへの併合を望んでいたわけであるから、ロスアルトスはこれを奪取するかたちになる）。モラサンに忠誠を尽くす連邦派や自由主義者との戦闘を重ねながらグアテマラの統一を狙っていたカレラは、ロスアルトス側が独自の税制を導入したことに猛反対し、モラサンによる中米統合を望まないイギリスを始め、フランスやベルギー等とも結託してこの税制の無効化を主張した。これによってグアテマラとロスアルトスの対立は決定的となり、グアテマラ市とケツアルテナンゴの有力紙上では相手側を批判・罵倒する記事が躍った。²⁴

ロスアルトスとグアテマラの対立に新たな局面をもたらしたのが、ケツアルテナンゴ政府から人頭税などの重税を課せられ、土地を収奪され続けていた「従順な」先住民の動向であった。ラファエル・カレラは

自軍の勢力拡大とグアテマラの平定のためには先住民を懐柔する方が得策だと考えており、「インディオの小共和国」を法的に保護すると宣言するなど、次第に破壊されつつあったカシーケ（首長）を中心とする伝統的な先住民共同体の維持を約束した。これに呼応するように、一八三九年一〇月以降、モリーナ政府に反発する先住民の武装蜂起が頻発するようになり、カレラもこの機を逃さず、ロスアルトスへの武器輸送ルート絶った上でロスアルトスに対する本格的な軍事行動を準備した。グアテマラ市内では、カレラの盟友フレデリック・チャットフィールド英国領事が、市民のロスアルトスに対する敵対心を煽り立てる任務を果たしていた。²⁵

一八三九年一二月、カレラはケツアルテナンゴ政府に反発する広範な民衆抵抗運動が起こっているとし、自らをその民衆運動を勝利に導く「解放者」だと位置づけた。カレラは救済を求めるロスアルトス民衆から多くの嘆願書を受け取った（その証拠は現在まで見つからない）とし、一八四〇年一月、グアテマラの「平和・威信・安全・自由・人権をかけて」チアパスに宣戦布告した。数千の軍を指揮したカレラは一週間ほどでロスアルトス軍を撃破し、約二〇〇〇の兵を率いてケツアルテナンゴに入城すると、カレラの支持者たちがこれを熱狂的に歓迎した。カレラはロスアルトスの市民に向かって、「（自由主義の愛国者の名の下で、あなた方に押しつけられてきた野蛮な抑圧体制を打ち砕くため）にやって来たことを強調し、グアテマラに從えば不正義や重税から解放すると約束した。そして、その翌月、ロスアルトスのグアテマラへの再併合が宣言されたのであるが、かの「公約」の多くを履行しないカレラに対して、その後も独立を望むロスアルトス民衆が繰り返し反乱を起こすことになる。²⁶

その後、中米連邦復活の夢を追い続けるモラサン軍も撃破したカレラ

ラは、ソコヌスコ地区のグアテマラへの編入を狙うが、軍事力に勝るメキシコのサンタアナが一八四二年にソコヌスコのメキシコへの併合を宣言したためにその目論見は外れた。結局、一八八二年九月にメキシコ・グアテマラ間で国境の確定に関する条約が締結され、グアテマラがソコヌスコのメキシコへの併合を正式に承認するまで、ソコヌスコをめぐる両国の対立は続くことになる。チアパスでは、相変わらずメキシコよりもグアテマラの方に親近感を持つ住民も少なくなかったが、そのことが一八二四年に投票によって決定されたメキシコとの関係を根底から覆すような政治運動に繋がることはなかった。

このように、ロスアルトスの独立からグアテマラへの再併合に至る過程は、既述のチアパスの動向と同様に、現在のメキシコとグアテマラの間の国境線が地元住民の明確な国家観とは関係なく確定されたことを示している。しかも人口の多数派を占める先住民は、政治エリート層に利用されることはあっても、チアパスやロスアルトスの政治に主体的・能動的に加わる余地はまったく残されていなかった。政治の場を奪われていた当時の先住民が自己を主張するためには、カスタ戦争の事例のように武力に訴えるしかなかったのである。

おわりに

チアパスは一八四二年、サンタアナによってメキシコに併合され、一八八二年にチアパス南端部の領有を主張するグアテマラとメキシコの間でメキシコのチアパス編入が正式に承認され、現在に至っている。しかしながら、スペイン植民地時代末期から一八四二年のチアパスの動向を見ると、そのメキシコへの併合は先住民を含めたチアパス民衆の意志とは言えず、チアパスを挟むメキシコ・グアテマラ両国の領土争いと、チ

アパス内におけるエリート間の権力闘争に絡む「上から」の政治的決定によるところが大きい。むしろチアパスはかつてグアテマラ軍務総督領に帰属し、中米地峡諸国と同じように独立戦争を経ずに独立し、新旧大都市や保守主義者と自由主義者の間の権力争いに巻き込まれ、グアテマラ市の権力に反発するなど、メキシコとは異なる「中米史」の文脈の中にあつた。とりわけ強固に中米連邦への帰属を求めたソコヌスコ地区やトウストラ出身のグティエレス知事の政策に代表されるように、チアパスには中米地峡への親近感を持つ者が少なくなかった。

このことは、かつてメキシコのナシヨナリストが主張してきたような、一九世紀前半にチアパス住民が自らの意志でメキシコへの併合を望み、「メキシコ化」の第一歩が始まったとする単純な歴史観の再考を迫らないではおかない。当時一般のチアパス住民は明確な「国民」意識を持っていなかったのみならず、国境線が刻々と変化していくことに対する社会的反応の薄弱さを鑑みるに、鮮明な国家帰属意識さえ持っていなかったのではないかと考えられる。チアパスと歴史的関係の深い隣接地域における政治的動向や紛争のありようも、そのことを示す状況証拠（歴史学的に断定するには現時点では史料があまりにも限定的に過ぎる）となつてい

る。例えば、現在のグアテマラ西部高地にあるロスアルトスは、チアパスと同様に自治意識が強く、グアテマラやメキシコとの距離感を計りながら一時独立を達成することにも成功した。結局すぐにロスアルトスはグアテマラに再併合されることになったが、その後も反グアテマラ運動が収まることはなかった。ただし、ロスアルトスの場合、一八七一年にこの地域出身のエリート白人であるフストル・フィーノ・バリオスがロスアルトス・エリート層の期待を背負ってグアテマラ大統領に就任し、上からのナシヨナリズム高揚政策を実施したこともあり、この地の白人・混

血層の多くは「グアテマラ化」していった。これに対してチアパスは、現在に至るまでメキシコの中央政治に主体的に関わった事例はなく、政治・経済的なメキシコの辺境であり続けている。

また、ユカタン半島を中心に中米を席卷したカスタ戦争の存在は、この地域の先住民たちが白人や混血民が模索していた国家概念や国家意識とはまったく無縁の民族意識や共同体意識を有していたことを示唆している。実際、一八七〇年代にはカスタ戦争の火の粉はチアパスにも及び、数年に渡ってサンファン・チャムーラを中心に先住民による白人・混血民に対する憎悪に立脚した先住民反乱が勃発している。彼らにとつてはメキシコもグアテマラも、自らが属する国や共同体として認識されてはいなかったのである。

では、チアパス住民はいつ頃、何を通じて自らを「メキシコの一部」と認識するようになるのだろうか（あるいは今日に至るまで認識しないのか）。これは、サパティスタ運動が立ち現れたチアパスを歴史的文脈の中で考察するためにも極めて重要な問いである。これについては、本稿においては未だ不十分である地道な史料研究を経た上で、本論と接続する形で機会を改めて発表することにした。

注

- ① 小澤卓也『先住民と国民国家—中央アメリカのグローバルヒストリー』（有志舎、二〇〇七）、一一頁。
- ② 同右、二二—三頁。
- ③ 同右、二六—七頁。
- ④ Andrés Aubry, *Chiaps a contrapelo. una agenda de trabajo para su historia en perspectiva sistémica*, México: Editorial Contrahistorias / Centro (de estudios, información y documentación), 2005, pp.88, 99.
- ⑤ Emilio Zebadúa, *Breve historia de Chiapas*, México: FCE, COLMEX, FHA, 1999 (Tercera reimpression), 2003, p.83.

- ⑥ Mario Vásquez Olivera, “Chiapas, Centroamérica y México (1821-1824). nuevos elementos sobre una antigua discusión,” Mercedes Olivera y María Dolores Palomo (coordinadoras), *Chiapas: de la independencia a la revolución*, México: Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social, Consejo de Ciencia y Tecnología del Estado de Chiapas, 2005, p.56; 小澤卓也「なぜ中央アメリカ連邦は崩壊したか」『立命館文学』五五八号（立命館大学人文学会、一九九九）、二二—頁。
- ⑦ Vásquez Olivera, *op.cit.*, pp.60-1.
- ⑧ 小澤前掲「なぜ中央アメリカ連邦は崩壊したか」二一—九頁。増田義郎・山田睦男編『ラテン・アメリカ史Ⅰ』（山川出版社、一九九九）、一九〇—頁。
- ⑨ Vásquez Olivera, *op.cit.*, p.63.
- ⑩ 増田義郎・山田睦男編「前掲書」二二—四頁。Zebadúa, *op.cit.*, p.98.
- ⑪ 小澤前掲「なぜ中央アメリカ連邦は崩壊したか」二一—八頁。Vásquez Olivera, *op.cit.*, p.58.
- ⑫ *Ibid.*, pp.65-6.
- ⑬ *Ibid.*, p.68.
- ⑭ *Ibid.*, pp.68-9; Zebadúa, *op.cit.*, p.95.
- ⑮ *Ibid.*, pp.95-6, 102.
- ⑯ *Ibid.*, p.95; Vásquez Olivera, *op.cit.*, p.70.
- ⑰ Aubry, *op.cit.*, pp.103-4.
- ⑱ Zebadúa, *op.cit.*, pp.101-2.
- ⑲ *Ibid.*, p.99.
- ⑳ Jean Piel, “Nacionalismo sin nación. El siglo XIX latinoamericano, entre utopías nacionalistas y realidades regionales,” Mercedes Olivera y María Dolores Palomo (coordinadoras), *Chiapas: de la independencia a la revolución*, *op.cit.*, pp.36-7.
- ㉑ Ralph Lee Woodward, *Rafael Carrera and the Emergence of the Republic of Guatemala, 1821-1871*, Athens and London: The

- University of Georgia Press, 1993, pp.113-4.
- ⑳ *Ibid.*, p.114.
- ㉑ *Ibid.*
- ㉒ *Ibid.*, pp.114-5.
- ㉓ *Ibid.*, p.116; Jean Piel, *op.cit.*, p.37; Robert Carmack, “State and Community in Nineteenth-Century Guatemala: the Momostenango Case,” *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988*, Austin: University of Texas Press, 1990, p.118.
- ㉔ Woodward, *op.cit.*, pp.116-7.
- (本学非常勤講師)